

---

# 屍・オブ・ザ・デッド

IT

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

屍・オブ・ザ・デッド

### 【Nコード】

N0589W

### 【作者名】

IT

### 【あらすじ】

ある日、街はゾンビで溢れかえった。しかし、人々は普通に生活をしている。大学新入生の僕（田中）もその一人だった。

## (1) 僕の街

僕が大学の法学部に入って三ヶ月が経った。初めての一人暮らしで、掃除、洗濯、料理と慣れないことばかりだったが、大分そういつた生活にも慣れ、友達もでき、充実した毎日を送っている。けれども、慣れないことが一つだけある。それは美しい川の多い、自然豊かなこの街に青白い顔をしたゾンビが溢れかえっていることだ。正確に言くと人口の5パーセントほどなのだが、見た目が見た目、動きが動きなので、違和感を感じずにはいられない。映画と違って、フレッシュな人肉を求めて、人を襲ったりすることはないのでその点では安心なのだが、人がゾンビになる原因はまだ解明されておらず、ある日突然ゾンビになってしまうので、人々は、日常生活を送りながらも、いつ自分がゾンビになるやもしれないとびくびくしている。僕もそうなのだが、対処方があるわけでもなく、今は何も考えず、淡々と授業を受けている。

ちなみにゾンビになる原因については諸説ある。新型の細菌のせいだとか、ただの痴呆の一種だとか、原発事故の影響だとか、多種多様の説があるが、はっきりこれだというのはまだ公表されていない。原因がわからない以上、ゾンビ達を隔離すべきだと思うのだが、人権団体の反対のせい、ゾンビの親族の反対のせい、はたまた政府の怠慢のせい、か実行には移されていない。従って、犬も歩けば棒に当たるではないが、犬も歩けばゾンビに当たるといふ不気味なご時世になっている。

ちなみにゾンビの方はというと、街をあーあー言いながら、うるついでにはいるものの、先ほども言ったようにこれといった実害はなく、生前の記憶もあいまって、自動車道に飛び出したりはしないし、信号があれば赤から青になるのを待つし、行列があれば律儀に後列に並ぶ。何の行列かは分かっていないだろうけど。そういう訳で、見た目が生気を失い、体が青白くなっているというだけで、実

際そこらへんの一般人と、変わりはないのである。無意味に殴られたり蹴られたりはするものの、ゾンビたちは私たち同様毎日律儀に生きているのである。

そういえばテレビを見ていると、ゾンビが「生きている」のか「死んでいる」のか議論になっているのをよく見かけるようになった。ゾンビたちは心臓は動いている。だからもし銃で心臓を撃ち抜けば、ぱたつと倒れ、簡単に駆除できる。頭を打ち抜く必要はないのである。だから「生きている」存在と見なすのが大勢をしめているのだが、脳死が人の死と捕らえられているのと同様にゾンビたちもやはり「死んでいる」と捕らえた方がいいのではないかという意見もある。

友人の松永にどう思っているのか聞いてみると「いや死んでいるだろ?」「生きている人間はもつと生産的だ」「早く駆除してほしい、ついでに街のホームレスも」という意見が帰ってきた。ちなみに彼は公務員になるために予備校に通っている。僕はというと、ゾンビ達は生と死の狭間にいる　という、あいまいな答えでお茶を濁すことにしている。図書館にでも行って、詳しく文献でも調べてみれば意見が変わるのかもしれないけども。

(2) 大学

朝、カーテンの隙間から伸びてくる日の日差しに気がついて、僕は目覚まし時計が鳴る前にうーんとうなりながら、のっそりとベッドから起きあがった。すると少し頭痛がしたので、僕は片隅に置いてあるバファリンをパチッパチッと二粒取り出して、ぐいっと水で飲みほした。時刻は九時だったが大学の授業が始まるまでには、まだ一時間半ほどあるので、パソコンの電源をつけてニュースサイトを開く。ニュースの見出しには、ゾンビの数ますます増える。政局を混迷。円高ドル安。株価は低迷。医薬品株は好調などなど……。ぼーっとパソコンを眺め、買い置きของジャムパンを食べながら、しばらくすると、僕は支度をして、新しく買った自転車で、アパートから一五分ほどの大学に向かった。

自然に囲まれた、都市郊外の僕の大学は今年も大人気で、学内は世相の暗さとは裏腹に、難関の入試を突破して自信と希望に満ちた学生達でとても賑わっている。僕は自転車置き場にがしゃっと乱雑に自転車を止め、教養課程の練へと向かった。するとその途中にある広場の片隅に新入生の美術課程専攻と思しき画学生がいた。どうやら、学内に入り込んできたゾンビが花壇の花を食べているのを描写しているようだ。僕は話しかけてみた。

「やあ」

「やあ、こんにちは」

意外と愛想良く、その画学生は返事をしてくれた。

「どうだいそのゾンビは？ 芸術的に見て」

「いやあ、いいゾンビだよ。元は、薬学部の女学生だったようだよ。知的で動きも洗練されている。異性からの人気も高かったそうだよ」

「ははは、どこからそんな情報を仕入れてきたんだい？」

「いやあ、描いているといるんな人が話しかけてきてくれるんだ。そしていろいろな情報をくれる」

やや金髪がかった長髪でどんよりとした瞳をしている痩せ形のその画学生はすこし得意げな顔をして言った。

「服装からして、最近ゾンビになったと見ていいのかい？」

「うん、そうだよ。まだ一週間と経っていないらしい。これといった損傷もないでしょ？」

「確かに」

僕は後ろ手で、あーあーとチューリップを食べるそのゾンビを好奇心に満ちた眼で眺めていた。

「結構動き回っているみたいだけど、描きにくいとかはないのかい？」

僕は質問してみた。

「それはないね。ゾンビは確かに動き回っているように見えるけど、僕には止まって見えるんだ」

「ふーん。それはすごいね。ちなみにこのゾンビは学内から、追い出されたりはしないのかな？」

「それは無いと思うよ。授業料も親御さんは払っているらしいし。学生証も持っているし。そこらへんの授業をさぼっている学生と大して変わりはないよ」

「それもそうだ」

僕は妙に納得した。

するとそのとき、東の空からカラスが飛んできて、ゾンビの首筋のあたりをついばんでいった。

「あー、傷ついちゃった。」

僕は惜しそうな顔をして言った。

「そうだね。綺麗なゾンビだったんだけどね。でもまだ綺麗な方だよ。街のゾンビと比べればね。それに少しぐらい損傷があった方がゾンビらしい」

そう言いながら、画学生は淡々とデッサンをしていた。

「そうだね。まあ、描き上がったから見せてよ、そういえば君の名前はなんて言うの？」

「吉井。気が向いたら、いつでも見に来てよ」

「ああ、楽しみにしてるよ」

そうして愛想のいいその画学生に僕は手を振りながらその場を離れた。

### (3) 学食

退屈な中国史の授業中、内容が唐から宋の時代に移り変わるなか、心地よい風が流れてくる西の小窓から雲一つ無い青空を上の方で眺めていると、初老の男性教授から　すでにテレビなどでさんざん言い尽くされ、皆に知れ渡っていることだが、確認の意味も込めたのだろう　ゾンビになる過程が発表された。教授曰く、まずいつもに比べてどうも体調が気だるくなったと思ったなら咳がコンコンと出だす。体温を計るとこの時点では平常時より少し高い。そして、洗面所で鏡に顔を写すと夜行雲のように青白くなっており、それにつれて異常に喉が渴き出す。　このあたりは狂犬病に似ている。そして次第に意識は薄れていき、気がつけばゾンビになっている、という寸法であるとのことである。そしてゆめゆめ気をつけるようにと無責任な忠告がなされた。皆すでに気を付けてもどうにもならないことを知っているし、それについてあえて突っ込みを口に出すこともない。僕も黙ったまま、たまっていた板書をノートに写した。

九十分の拷問のような講壇を聞き流し、休み時間になって、廊下に出るといつもより神妙な面持ちをした松永がいて、相談があると言われた。相談なんて柄じゃないだろうと思っただが、何のことが聞いてみると、どうやら、松永の知り合いが学校に来なくなったらしい。ゾンビになった疑いがあるということ、良かったら一緒に来てくれないかということだった。昼休みで時間もあるし別にかまわないと僕が返事をする、松永はありがとと、口角を少しへこまして僕に握手してきた。とりあえず学食で腹ごしらえをしてからにしないかと僕が提案すると、松永も、ああ、と小さな返事をしたので、二人で一緒に学食に向かった。

中央会館一階の学食で僕はきつねうどんを松永は塩ラーメンを頼んだ。そして空いているテーブルを見つければ二人並んで腰掛けた。



「いつ頃から来ていないんだい？」

うどんをすすりながら、僕から会話を切り出してみた。

「三日目になるらしい。坂本は一緒の高校を出ていて、割と仲がよくなって、親御さんとも知り合いなんだ。でも担当の教授はいきなり親御さんに電話をかけて心配さすのもどうかと思っただらしく、誰か見てきてくれないかと学部生に頼んだらしいんだけど、どうもみんな薄情なのか臆病なのか誰も行こうとしない。そこで俺に電話がかかってきてよかったら見てきてくれないかと……そうなる」と嫌とも言えず、どうせならと思っただらしくお前に頼んでみたというわけさ」

塩ラーメンをすすりながら松永は僕に事情を話した。

「三日目か……それは心配だな。ゾンビになってなきやいけど……どうだろうね」

……問いかけに、松永は何も答ええない。

そして、十五分ほどで素早く昼食を食べ終わると、食器を洗って、さっそく二人、自転車を並べてで、坂本のアパートに向かった。

(4) 坂本のアパート

二十分ほど自転車を漕ぐと、僕たちは坂本のアパートに辿り着いた。アパートは四階建てで、三階の303号室が坂本の部屋らしい。僕は松永の後に付いていった。のそのそと重い足取りで階段を上り、殺風景なシルバーのドアの前にたどり着くと、松永はピンポンとチャイムを鳴らした。……そして、しばらく待ってみたが、誰も出ない。コンコンとドアを叩き「おい坂本」と松永が名前を呼ぶが、それでも誰も出ない。ガチャリと僕がノブを回してみると鍵がかかっていなかった。僕たちは意を決して部屋に入ってみることにした。ドアを開けるとゴミだらけの玄関に靴が散乱していた。中からは腐敗臭がする。二人ともうっとなったが引き返すわけにも行かないので、嫌々靴を脱いで、部屋に入り込んだ。なかには小太りの眼鏡をかけた青年が、一匹の猫と一緒に部屋の角にうずくまっていた。

僕たちは足音を立てないように静かに忍び寄っていった。

「……お、おい坂本。大丈夫か？ しつかりしろ」

小さな声で、松永が坂本を軽く揺ると「うーん」とうなり声を上げて、のっそりとだるそうに上体を起こした。顔を見ると汚らしい肌色だった。

「誰だい？ まったく。うっとうしいな……」

ひげ面で汚い肌のおよそ十代には見えないその青年は眼鏡を外し、眼をこすりながら、小さな声でそうつぶやき、僕たちの存在を手で振り払おうとした。

「あ、坂本、よかった。無事だったんだな。みんな心配していたんだぞ。ゾンビになったんじゃないかってな。元気そうだし、さつさと準備して大学に行こうぜ」

松永は坂本の肩のフケをぱっぱと振り払ってやりながら言った。

「……いけないよ」

坂本は松永の手を振り払い、傍らの猫をなでながらつぶやいた。すると猫がにゃーんと鳴いた。

「どうして？ なにかあったのか？」

「……言えないよ」

「なんだよ、水くさいな。高校時代からの仲じゃないか、言えよ。どうしたんだ？ いじめられでもしたのか？」

松永が優しい声で聞いた。

「……振られたんだ」

「は？ 振られた？ どういう意味だ？」

「言ったとおりの意味だよ。同じ学部の橋本さんに……勇気をだして告白してみたんだけど……だめだったんだ。それ以来。恥ずかしくなって……大学には行ってない」

僕たちはぽかーんとなった。

「そ、そうか。よし、坂本、元気を出せ。お前はかつこいいんだから、恋なんていくらでもできるさ。だからさ、いつしよに大学に行こうぜ。鏡をしてみる。街のゾンビよりかよっぼどまだろ？」

松永は坂本の肩をぽんとたたいて元気づけた。

「……なぐさめになってないよ」

坂本はそう言ってまたうずくまった。

「田中、手間を取らせて悪かったな。俺はコイツの部屋を片付けていくよ」

松永はぱつと立ち上がって足下のゴミを蹴り飛ばした。

「そう、そうか。じゃあ、僕は午後から授業があるからこの辺で……」

僕はゴミの片付けまで手伝う気にはなれなかったので、静かにその場を後にした。

僕は放課後、先輩の佐藤さんに囲碁を教わりに行った。サークル練の2階の雑然とした囲碁部の部室には数人の部員がいて、佐藤さんだけが一人詰め碁を解いていた。僕がこんにちはと挨拶をすると、佐藤さんがおうと返事を返してくれた。ちなみに佐藤さんは数学科の学生で、留年を重ねており、今は八回生である。

さつそく四子置いてもらい、パチパチと打ち出す。

「……そう、あまり考えずに打っていいんだよ。少しずつ自分の型を見つけていけばいい」

打ながら佐藤さんからアドバイスを貰う。

「うーん、逆に囲まれているような……」

右下隅の石を見ながら、少し手を止めると、周りのパチパチという音が幾分大きく聞こえてきた。

「ははは、大模様を作ろうたってそう簡単にはいかないよ」

そう意って佐藤さんは軽快に石を捌いていく。

「ふう、困ったな……」

「研究が足りないね。研究だよ。研究。研究が勝負を決めるんだ」

佐藤さんはアゲハマの石をじゃらじゃらと鳴らしながら隣の碁を見ている。

「あ、そういえば、佐藤さんは何の研究しているんですか？」

傍らのお茶を飲みながら僕は聞いてみた。

「囲碁？ それとも、数学の方？」

「あ、数学の方です」

「ふふふ、聞いて驚くなよ。フェルマーの最終定理だ！」

佐藤さんの得意げな顔を見て、僕はびっくりしてしまった。

「フェ、フェルマーの最終定理ですか？ あれは確か、1994年

にプリンストン大学のアンドリューワイルズが証明したんじゃない……

「……」

「ほう、よく勉強しているじゃないか。それなら証明法は知っているか？」

佐藤さんもお茶を飲みながら濃い眉毛の下のグリっとした瞳を僕に向けた。

「いえ、そこまでは……」

「なら説明してやろう。谷山・志村予想というものがある。日本人数学者が血と涙を注いで作り上げた、すべての楕円曲線はモジュラーであるという革新的な予想なんだが、フェルマーの最終定理の証明にはこの予想が重要な鍵となっている。手順はというとまずフェルマーの最終定理が自然数解を持つと仮定する。するとこの自然数解からはモジュラーではない楕円曲線を作ることができる。だが、もしも谷山・志村予想が正しいのなら、モジュラーでない楕円曲線は存在しないことになる。よってこれは矛盾するので、最初の仮定が間違っていたことになる。すなわちフェルマーの最終定理は自然数解を持たない。つまり正しい。よって谷山志村予想が真であることを証明すれば、それすなわちフェルマーの最終定理を証明したことになる。これがアンドリュー・ワイルズが示した、証明の基本方針だ。これを背理法と呼ぶんだが、今現在、俺はその証明方法を認めていない。だから、俺の中でフェルマーの最終定理は証明されていないんだ。何故背理法を認めていなかった？ 背理法は悪魔の使う証明法だからだよ。神はこんな証明を求めていないし、認めない。背理法を認めてしまったら、真実が存在しなくなる。だから俺は別の方法でフェルマーの最終定理を証明しようとしているんだ。分かるか？」

「はあ……でもそれ、担当教授が認めてくれるんですか？ 僕はぼかんと口を開けながら聞いた。

「……分かってくれる人はいる。その一人は神と思っれていい」

「そうですか……」

僕は半ば聞き流して、またパチパチと打ち出した。

「おっとその石取れるぜ」

「あ、しまった」

僕は頭を抱えた。

「あ、そうだ。なあ、実は俺、明日アルバイトがあるんだけどでも、急用で行けなくなっただ。だから俺の代わりにバイト、行ってくれないか？ どうせ暇だろ？ な、頼むよ」

「えっ、は、はあ、暇ですけど、仕事によりますよ？ どんな仕事なんですか？」

「医学部生の研究ためにゾンビをアルコール漬けにする仕事。なんだが……嫌とは言わないよな？」

「……は、はい」

僕は、頷くことしかできなかった。

(6) アルバイト

次の日医学部の一号練の前の集合場所に行くとき女性と男性の二人がぼつんと突つ立っていて、片方のひやろつとしていているが筋肉質の三十代後半位の男がこちらに声をかけてきた。

「おはよう。君が佐藤君？」

「あ、おはようございます。いえ、僕は田中といいます。佐藤さんは急用があつて代理で……」

「そう。まあ、いいか。私は責任者の石田、こちらは竹中さん。看護科の学生さんだそうだ」

「あ、……よろしく、おねがいします」

やや陰気な顔をした小太りな女性が、か細い声で挨拶するのと同じ時に、静かに頭を下げた。

「それじゃあ、二人共私に付いて来て。脇にトラックを止めてあるから。そこからゾンビ達を台車で地下に降ろしていくんだ」

僕たちが石田さんに付いていくと4トトラックが練の脇に止めてあつた。そして石田さんがトラックの後ろに回り荷台をあげた。僕が恐る恐る荷台を覗くと確かに動かない、息の根の止まったゾンビ達が折り重なつて、静かに横たわっていた。

「よし、それじゃあ、仕事に取りかかるぞ」

石田さんが僕たちに声をかけた。そして石田さんが荷台からが一体一体ゾンビを下ろし、それを僕と竹中さんが腐敗臭を我慢しながら台車に一体ずつ乗せた。そして石田さんを先頭に練に入り、地下にあるという死体処理室向かう。休日の練は静かで、一階には人影は無かつた。僕たちは階段横の扉から地下の廊下に入っていく。

「暗いですね」

「しかたないさ……」

「このゾンビ達は？」

「身よりのないゾンビ達さ……」

僕が聞くと、石田さんはそっけない返事をする。

いくらか進むとそこにはもう表の光が入ってこず、そのせいで薄暗く、まばらに取り付けられた電灯はたまにチラつく上に、その度に飛ぶ蛾がびんびんと耳障りな羽音を廊下にこだまさせるので、気分がどんどん沈んでいく。ゆっくりとなだらかな坂になっている地下廊下を何回か半円状に折り返しながら、ガラガラと台車の車輪音を響かせながらしゃにむに降りていくと、最後に長い直線廊下が現れ、その先に赤い電灯と大きな取っ手のついた扉が僕たちの目の前に姿を現した。

「少し待ってな」

そう言つと、石田さんは台車を置いたまま、近くにある管理人室に入つていった。そして、しばらくがさごそと何か作業をしてから、こちらに戻ってきた。

「ほら、マスクとゴム手袋。アルコールは体に障るからな。」

そう言つて僕と竹中さんにばいっと放り投げるようにそれらを手渡した。そして、ガチャガチャと死体処理室の鍵を開け、ゴウンと廊下に解錠音を響かせて、厳かにその扉を開けた。中からは湿つぽいのにごわごわした臭気が立ちこめており、僕と竹中さんは一瞬うつとなつて顔を覆つた。死体処理室は天井が思いの外高く、白いタイルが敷き詰められており、一目すれば浴場とも見紛うような清潔感溢れる作りになっていた。

「そのまま、台車から、ずるりと流し込めばいいから」

一般の死体とゾンビが何体が沈んでいるアルコール浴槽を一度、一同で確認してから、石田さんは手際よく、ゾンビの頭に鉤を引っかけて、ぼちゃんとアルコール水槽に流し込んだ。

「これでよしと、ほら、次は君の番だ」

石田さんは自分の台車をどけて僕の台車を前に出した。そして手に持っていた鉤を僕に渡した。僕は一瞬戸惑つたが、なるようになるよと、ゾンビのちょうど額の部分に鉤をひっかけ、そしてずるりとアルコール水槽に流し込んだ。



「そう、それで、いいんだ。よし、次は竹中さん」

「あ、は、はい」

竹中さんは不安げな顔をいつそう強ばらせており、鉤を受け取る手はガクガクと震えていた。

僕が台車をどけた後、竹中さんも僕と同じようにゾンビの額に恐る恐るえいと鉤を引っかけた。その瞬間だった。

「あ、ああああああああ」

眼を閉じていたゾンビが眼を覚まして、手をもがきだした。

「きゃああああ」

それに竹中さんは驚いて、足を滑らせ、アルコール水槽にばしゃんと落ちた。

「くそ、死んでねえじゃねえか」

石田さんが、ゾンビの頭に引っかかっている鉤を取り外し、それをゾンビの心臓に打ち替えた。

「ぎええええええええ」

ザクツとゾンビの胸に鉤が突き立ち、断末魔の叫びが部屋にこだました。

「大丈夫か？」

「だ、駄目です。沈んでしまつて……竹中さーん」

僕はマスクを外し、水槽の奥深くに沈んでしまった竹中さんに必死で呼びかけた。

「く、くそ、何か棒のようなものはないのか！」

「そんなの僕に聞かれても分かりませんよ！」

竹中さんはアルコール水槽の底でプクプクと泡を出しながらも、底のゾンビに引っかかって浮かんでこない。

「………仕方ない。元は普通の死体が沈めてあつたんだ。このまま作業を続行しよう」

「そんな、救急車を呼ぶべきですよ。今ならまだ助かります」

僕は石田さんの裾をつかんで懇願した。

「いいか？ 責任を問われるのは俺なんだよ。お前じゃない。バレ

たら失業だ。慰謝料も払わないといけない。それを分かっているのか？ おい作業を続けるぞ。何か言いたいことはあるか？」

石田さんが鉤をチラつかせながら僕に言い聞かせた。

「い、いえ……」

僕はそう返事して、二台の台車を重ねて、地上に戻っていった。

そして作業を続行した……

「はい、これお給金。サービスしておいたから」

作業を終えると、僕は石田さんから藁半紙の封筒を受け取った。

「それじゃあ、きょうのことは秘密にしておくように！ それじゃあまた頼むよ！」

石田さんはそう言って笑顔で去っていった。封筒を覗くと五万円が入っていた。

## (7) 不眠

その日の夜から僕は眠れなくなった。理由はだいたい分かっているが、どうしようもない。

しかたがないので、僕はこの不眠症の解決法を探るようになった。まず僕は大学の帰りに街のCDショップで、円高のおかげで安くなったビル・エバンスの「ワルツ・フォー・デビー」を買い、アパートに戻ると掃除と洗濯をして一汗かいた。すると夕食の時間になったので、きのこやほうれん草など、ビタミンの豊富そうなものサツと酢と醤油で混ぜて、できあがったおひたしを少量のごはんと一緒にゆつくりとよく噛んで食べた。夕食後は緑茶やコーヒーなどのカフェインが入った飲み物を取らないようし、代わりにはちみつを入れたホットミルクを飲む。お風呂は温度を38度に設定して半身浴にした。体を綺麗にしてさっぱりした後、ストレッチをしながら、足をマッサージして血行を良くする。そして買ってきたCDを中音域を強めにして流し、それにまったりと聴き入りながら、布団に入り詰め暮を解く。そして眠くなるのをじっと待つことにした。……がそこからが問題だった……。いくら時間が経つても、一向に眠くならない……。午前中の出来事が脳裏にチラついて、頭を掻きむしりながら、時計を見ると二時、三時……。そこからいくらか寝たような気もするが、とても熟睡したとは言えず、頭がすつきりしない……。。

翌日講義にも出席はしたものの、内容が、頭に入っていない。これはまあ、いつもどおりだけど……。

そんな日が数日続き、僕は意を決して商店街で睡眠薬らしきものとウイスキーを買った。

アパートに戻ると、冷蔵庫でさっそくウイスキーを冷やし、いつものように夕食を少なめに取って、しばらくしてから冷蔵庫からそれをおもむろにぐいっと野武士のように取り出し、グラスに注ぎ、

そこに氷を入れて水割りにした。そして、薬局で買った睡眠改善薬をものさしでガンガンと机の上で叩き、粉になったところを小皿に移してそれをグラスの中に加えた。後はマドラーで力チャカチャとかき混ぜ、できあがったところを一気に飲み干す。しばらくすると天井がぐるぐると回りだし、気分が悪くなってきた。しかし眠くはならなかった。

ちよつと前に買った「思考の整理学」という本を本棚から取り出し、ぱらぱらと開いてみる。いくらか読み進めてみたが、当然、思考はまとまらない。そしてまた酒を飲んでみると、気を失ったのか、少しだけ眠れた。

次の日、僕は松永に相談してみた。

「眠れない？ 睡眠薬を飲めばいいじゃないか」

「いや、街の薬局で買って飲んでみたけど眠れなかった」

「なら、精神科に行った方がいいぜ、本格的な睡眠薬を貰った方がいい」

「いや、精神科には抵抗があるんだ」

僕はうつむき加減で松永の意見を否定した。

「街のクリニクなんて普通の病院と変らないさ。さっさと予約を取って見て貰った方がいい。目の下にクマができてるぜ」

「クマか……」

そう言われると僕はまた不安になって、結局松永の意見を聞くことにした。

そして夕方、タウンページを開き、上田メンタルクリニクという、商店街の脇にある精神科の予約を取った。

市内にある寂れた商店街の外れにあるビルの二階に、古ぼけた看板と一緒にそのクリニックはあった。

僕は入り口の側であーあー言っているゾンビを蹴飛ばして、階段をとことこと上っていった。そして、上田クリニックと書かれているガラス張りの扉を開けると、右手に受付があった。

「すみません。予約をしていた田中ですけど……」

受付のシヨートカットの綺麗なお姉さんに、僕は話しかけた。

「こんにちは。初診の方ですね。それではこちらに質問事項が書かれた用紙がありますのでこれに記入してお待ち下さい」

僕はニコツと笑顔を見せてくれた受付のお姉さんに好印象を抱いた。そして気分を良くしながら、待合室の二列に並んだソファの片方に座った。待合室は綺麗に掃除されており、奥の方にはテレビに小川の流れる様子が映し出されている。回りには診察を待つ人が三人静かに座って待っていた。僕は受付で貰った用紙に目を遣りながら、ふーつと息をついて、天井を見上げてみた。

「チツ、新入りか……」

昼光色の電球が目に入ったとき、隣の坊主頭の男が小さく、そうつぶやいてきた。

僕は頭を下げて、目線を前にやった、すると「うふふふ」と前のソファに座っている、髪の毛の長い中年女性がニターツと笑って髪の毛を一本抜いてふーつとこちらにそれを吹き飛ばしてきた。僕はそれに見なかつた振りをして、さらに目線を下げて、用紙に鉛筆で記入することにした。

しばらくして用紙に記入を終え、ぼんやりと名前が呼ばれるのを待っていると、回りの人たちが一人、また一人と診察室に入っただけで、そして、受付で診察料を払って出て行った。坊主頭の男も僕の方を見て、へらへら笑いながら、「まあ、仲良くやろうや」とだ

け言っ出て行つた。そして待合室は僕だけになった。

「田中さん、どうぞ」

診察室の扉が少しだけ開き、名前を呼ばれたので、僕は意を決して診察室に入った。中には髪を七三に分けた四十代前半位の丸顔の男がいた。

「こんにちは、どうぞおかけください」

精神科医に手を前に出されたので、僕は言われるがまま椅子に座つた。

「やあ、やあ、こんにちは、今日はどうなされましたかね？」

「眠れないんです」

僕は単刀直入に症状を話した。

「ふーむ、眠れないと。うーむ。何か悩みでも？」

「いや……別に」

僕は思い当たるフシがあるもののそれを話すわけにはいかなかった。

「悩みもなにもないのに、眠れないと。君、大学生？」

「はい、大学生です」

「そうですね。うーん、なら、たぶん、少し頭がおかしくなっているんでしょうね。ふむー。うーん、それではハルシオンを出しておきます。寝る前にお飲み下さい。それでは次回は一ヶ月後でいいですか？」

「え、それでいいんですか？」

僕は薬の知識がないので、あつさりと種類を決められて少し不安になった。

「いいって、何がですか？ 御希望なら、気分を落ち着かせるためにトリプタノールという薬もお出ししておきますけど、どうしますか？」

「あ、じゃあ、念のためそれもお願いします」

「それでは、また一ヶ月後薬が切れたらお越し下さい。お待ちしております」

僕と精神科医は互いに礼をした。そして、僕は診察室を出た。その後、受付で診察料を払い、薬局で処方箋通りに薬を買ってアパートに戻った。僕は早速薬をウィスキーにぶち込んで、ガブツと飲んで見た。それらは、とても良く効いた。

(9) 自殺方法

気を失ったように眠りについて、気がつくと昼過ぎだった。頭痛がするが、お腹がすいたので、準備をして、学食に行く。

馴染みの学食で食券を買って、一人静かに昼食を取っていると後ろから、幼なじみのユリが話しかけてきた。

「やつ。どう、きつねうどんおいしい？」

ユリはいつも通り元気そうに僕の肩をぽんとたたいた。

「ん、ああ、ユリか。うん、まあ、おいしいよ」

僕はそっけない返事をして、ずるずると麺をすすった。

「へえ、そうなんだ。じゃあ、私も今度食べてみよ」

ユリは手に持ったミートスパゲティを僕の隣に置いて、そして座った。

「なあ、ユリ」

「何？」

「何かいい自殺方法知らない？」

「え、何て？」

ユリはぶほつとスパゲティをはき出しながら聞き返してきた

「自殺方法だよ。参考に聞いておきたいんだ」

「どうしたの？ 死にたいの？」

「いや、まあ、ユリなら何か知ってるんじゃないかなって、思って………参考にね」

「………私の事、どういう目で見てるの？ 私はふっつーの女子大生なのよ？ あまり変な質問しないでくれる？」

ユリは少し不機嫌な顔になった。

「そう、やつぱり知らないか………」

「………ふう、じゃあ、少しだけアドバイスしてあげるね。

まあ、首吊りが一番オーソドックスじゃないかしら？ きつちり嵌れば苦しまずにあの世に行けるわ。次ぎに飛び降り自殺。これもち



やんとした高さから飛び降りれば、苦痛なくあの世にいけるわ。この二つが両横綱と言った感じね。その他の自殺方法はいくらか苦痛が伴うわ。手首を切ったり、薬をオーバードーズしたりね。」

「やっぱり、その二つになるのかな……いや、首吊りは僕も考えたよ。でも、首吊りだとあまり個性が無いと思わないかい？ なんとなく日本的だし、それに死刑囚も首吊りだよな？ 後始末も考えないと行けないし。最後までは迷惑をかけずに死にたいよね。つまり、美しくあの世に行きたいんだ」

「それじゃあ、焼身自殺はどうかしら？ 大学のグラウンドの真ん中で死ねば大して迷惑はかからないし、苦痛にのたうち回る姿は観衆の感動を誘うわ。それはとても美しい死に方だと思うの。確実に死ぬるとは言い切れないけどとにかくインパクトは抜群ね。でもとにかく苦痛らしいわよ。何せ死ぬまでが長い。呼吸もできない。のたうち回って最後は事切れるように死ぬことになるわね。何か伝えたいことがあるならこれをお勧めね。あ、そうそう、硫化水素とか一酸化炭素とかはやめてよね。とにかく近所迷惑だから」

ユリはあきれた顔をしてスパゲティをすすった。

「そう。でも、苦しいのは嫌だな。はあ、拳銃が手に入ればいいのにな。一瞬で死ぬるのに」

僕はうつむいてうどんをすすった。

「やっぱり首吊りがいいんじゃない？ 死ぬの決めたら電話してよね。死んだ頃を見計らって警察に連絡してあげるから。あ、そうそう、ゾンビになるっていう方法もあるわよ。なり方は分からないけど」

「でも、ゾンビになるって言うのは自殺したことになるのかな？

損して得を取るじゃないけど、自殺したけど生きているというか……」

「そうね。大学内を徘徊されるのも困るしね。やっぱり首吊りじゃないかしら」

「やっぱりそうなるのかな」

「………まったく、元気出しなよ。暗い話していると本当にゾンビになっちゃうよ」

ユリはぼんと僕の肩をたたいた。そして一気にスパゲティを平らげて、「ちこそうさまと言って去っていった」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0589w/>

---

屍・オブ・ザ・デッド

2011年8月29日01時45分発行